

## 診療体制部会 活動報告書

部会長 稲葉 雄二

### 1 今年度の取組

#### ①発達障がい診療地域連絡会

ハイブリット式で企画し、感染状況によってオンライン研修に切り替えるなど、各所柔軟に対応しながら事例検討会や研修会を実施（R5年1月現在、8圏域で8回開催済み）。前年度に引き続き、「LD」をテーマにしている圏域が多く、それに伴い連絡会への教職員の参加も増加。地域連絡会は、支援者の支援力向上だけでなく、地域支援者間の顔の見える関係づくりの場にもなっている。

#### ②発達障がいかかりつけ医研修

10月にwebで開催し、計86名が参加。発達障がい診療のすそ野を広げるため、「かかりつけ医の診療における発達障がい児者への対応について」をテーマに取り上げ、発達障がいの特徴や対応方法、利用できる福祉サービス等、基礎について学ぶ機会となった。

#### ③発達障がい診療人材育成事業

医師の数は限られているため、医師やコメディカルがトリアージを行い、優先順位をつけて診療するなど圏域ごとに工夫して対応しているが、医師不足や医師の偏在等の根本的な課題解決には至っていない。引き続き事業を進めていく。

#### ④LDへの対応

連携・支援部会と合同部会を開催し、学校から医療機関への情報提供時の統一様式を検討した。医療機関から要望があった際など必要に応じて使用していただく他に、学校では、統一様式により、ASDやADHD等でフォローしている児童生徒のLDの可能性に気付くきっかけになることを想定している。合同部会で出された意見等を基に、共通様式の項目等について部会で検討を進めていく。

### 2 今後の方向性

#### （1）医師の人材育成

住み慣れた地域で発達障がいの診療を受けられるよう、医師の人材育成を継続する。  
診療できる医師の偏在についても検討していく。

#### （2）円滑な成人期医療への移行

小児医療と精神医療の対応の相違などの理解が求められる。  
県が信州大学医学部附属病院に委託している「移行期医療支援センター」とも連携しながら、発達障がいのある方の移行期をどう支援するか議論を深めていく。

#### （3）LDへの対応

検査や診療ができる人材の発掘及び整理、教育から医療へのフィードバックについて検討。

### 3 来年度取り組むべきこと

上記について、順次進める。